

Title	11才の少女のロールシャッハプロトコル : (1)スコアリング
Author(s)	氏原, 寛
Citation	大阪外国語大学学報. 53 p.25-p.36
Issue Date	1981-10-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80844
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

11才の少女のロールシャッハプロトコル

(1) スコアリング

氏 原 寛

A Rorschach Protocol of An 11- Year Old Girl

(1) Scoring

Hiroshi UJIHARA

The author presents a Rorschach Protocol and its scoring. It seems to him that until now Rorschachians in Japan tended to be too much preoccupied with "exact" scoring and forgot to give a meaningful interpretation of the test. But the Rorschach Test is, above all, for an interpretation not for scoring. Furthermore, one cannot exactly score a protocol without understanding its interpretative meaning. To make this clear, the author shows this time a protocol taken by a beginner. The author thinks that the problems found in it are those of scoring a protocol. He, therefore, does not omit explanations that are self evident for experienced testers. The author will be happy if they show interest in his way of scoring.

The author will report next time on the interpretation of this protocol.

はじめに

依然としてさまざまな論議のある中で、投映法、とくにロールシャッハテストやT A Tの学習を志す者が少なくない。その理論的妥当性と臨床的有用性の問題については、今までにも触れたことがある（たとえば氏原1980）のでここであらためてとり上げることはしない。今回は、実際のプロトコルからどのような手順でスコアリングがなされ解釈にまで進んでゆくのかのプロセスを示したい。筆者は、ロールシャッハテストのユニークさは、それが被験者の知覚の仕方、つまり「いかに見たか」を明らかにするところにある、と思っている。したがって、何よりもデータミナントの分析が解釈上有用であると考えている。それはいい代えれば、量的分析を重視することであって、そのためには、何よりも正確なスコアリングが不可欠である。しかし、被験者の反応には、しばしばどう分類してよいか判断に迷うものがある。こういう場合、その分類しにくさが実はその反応の特徴なのであって、これを無理にどこかに分類してしまうことは、かえって反応の意味をかなり切り捨てることになりやすい。そこから、ああは分類したけれども、こっちのカテゴリに入れてもおかしくはない、というひっかかりの残ることがある。しかし、解釈上この

ひっかかりは非常に大切なものであって、そこからテスターそれぞれのスコアリング上の癖のようなものがそれぞれに自覚されてくれば、解釈上は どう分類されていても結果的に大差ないこととなるのではないか、と思われる、つまり教科書的な解釈仮説とは別に、というよりそれを踏まえて、自分なりの解釈仮説をもつことになるからである。もちろん量的分析にとどまらず、一つ一つの反応の質的分析が以上の不備を補うのはいうまでもない。

それらのことを考えると、一応分ったことになっているスコアリングの手順を示しておく必要がある程度あるのではないか、と思うようになった。そこでやむを得ず切り捨てた部分が、解釈の段階でどう生かされうかを示すことも含めてである。このプロトコルは、そのためもあってことさらに初心者によるものが使われている。質疑の不十分さを指摘することによって、スコアリングに際しての解釈的な考慮の重要性を示すことができれば、と思うからである。

1. 症例

被験者は11才の少女である。2年前内臓疾患のため3か月程入院し、順調な経過をたどって退院した。しかし半年後疲労感を訴え再入院。各種の検査および医師の判断では顕著な所見が見られない。現在病院内において遊戯治療を継続中であり、このテストはその第7回目に同じセラピストによって施行された。

2. プロトコルおよびスコアリング (スコアリングは主にクロッパー法 (Klopfer, 1954) によっている)

I カード 10秒。ネコ。V オジイサン。ここ (プロット上部に接した白い背景の部分) ヒゲ。< 地図。でもさかさまかな。もうない。1分50秒。

(質疑) ミミ (d_1)。たれ目の目 (上のS 2つ)。ヒゲ。白いヒゲ (下のS 2つ)。ヒゲがたまっている方が暖いから。全体がネコの形に似てるから。

ミミ (d_1)。マユ毛。オジイサンになったら白髪になるから。目。ヒゲ描けなかったからここまで。横の毛 (d_2)。纏めてしばってある毛。10本くらい。1本じゃ弱いから。(ハナがないけど) これハナ (D_1 中央のネズミ色の薄い部分)。

これ逆さまだけど大阪府。形。ここの穴は何かな。分かんない。ここが一番大きな都市かな。(どうして?) 人が多いこと。

1. W,S F,C'F Ad 1,0

このカードを正面から見た動物の顔とする反応は珍らしくない。その場合 D_s ないし d_1 がミミと見られる。したがってここでミミを指摘したことで形体水準が上がったとは考えにくい。S部分を使って目といいヒゲというのも、全体の反応を損なう程ではないが積極的な明細化ともいい難い。白いヒゲは一応頷けるが、「たまっている方が暖い」という説明はナンセンスである。

2. W, S F, C'F Hd 1.5 → 0

白いマユゲはプロットの特質を生かし明細化が進んでいるので、0.5をプラスすることができる。ヒゲが描けなかったからここまで、というのは、白い背景の部分を恣意的に切りとったものであり、それで体形レベルが上がったとはいえない。横の毛はプロットの説明にはなっても、おじいさんの属性とはいえないのだから無用の説明である。ただし、ここで陰影の使われている可能性が少しあり、それについてもう少し確かめるべきであったろう。「ハナがないけど」というテスターの発言は言いすぎで、「これハナ」というその位置の偏りは、被験者の責任に帰するわけにゆかない。大体の輪郭と目などがあれば人間の顔としての基礎形体は整っており、それ以上は自発的発言をまち、それがプロットの特徴をふまえ反応内容の特性を一そう明確にしている場合にのみ若干の付加点を与えるわけである。だから、被験者がハナを見ないで人間の顔と反応するのはありうことであり、そこでことさら「ハナは？」と尋ねられると無理な説明を誘発することになりやすく、この場合がそれに当てはまる。

3. W F Map 1.0

一般に地図は不定形であるが、それが特定の場所のものであれば定形となる。S部への言及はあるが「何か分らない」というのでは反応というよりはコメントととるべきであろう。ただし、「ここが一番大きい都市かな」というのは、どうしてそう思ったかを確認するべきである。平面的な地図というよりも、多少の凸凹なり厚みを感じている可能性がある。「人が多いところ」という説明は、「暖い」とか「弱い」という1,2,での説明と同じく、プロットとは何の関わりもないコメントにすぎない。解釈的には見逃すことのできぬものであるが、スコアリングには関係のない発言である。

Ⅱ カード 13秒。V チョウチョ。人間、ここ (D₂) 足。もうない。1分20秒。

(質疑) ハネ (D₄)。4枚あるうちの。ハネ (D₃下部)。触覚 (D₁下方突起)。頭があって触覚。なんか飛びそうな軽い感じ。形はここ (D₂) が似てた。アゲハチョウ。足。靴下はいてる。子どもが赤い靴下。家で遊んでいるところ。手。服が珍しいから喜んでいる。普通はここから出てるけど。黒い服 (黒の部分)。顔は触覚は入らない。黒い所が目、薄いところがハナ。白い線は関係ない。(口は?) 口はない方がいい。

4. W FM A 2.5

D₃を上下に分けてハネを四枚指摘しているのは、珍しいけれどもとくに秀れた明細化とは思えない。ただし触覚の指摘は、それが本来チョウの特徴の一つでありプロットの形からも頷けるものであり、付加点到値する。同様にD₂によるアゲハチョウという説明は、アゲハチョウがチョウの中でも特殊な形体をもつものであって、いわゆる基礎形体レベルが平凡反応より高い1.5に属するものと考えてもよい。「飛びそうな軽い感じ」はまだ運動にまで至ってはいないが、その直

前の姿勢を見ているとも考えられる。そこで一応FMとしてスコアしておいたが、厳格に考えるならばFでもよいと思っている。そういう微妙な反応であることを弁えておけばよいので、FかFMのどちらが正しいのかを神経質に考える必要のないことは、すでに述べた。ただしこの運動感覚を建設的な明細化とみなすことは可能である。

5. W, M, FC, FC' H 1.5

赤い靴下と黒い服は、それぞれプロットの属性に基づいた明細化であるが、子どもがいつも赤い靴下と黒い服を着ているわけではない。何色でもよいものをたまたまプロットの色彩と結びつけたにすぎない。したがってこれを建設的な明細化と認めることは難しい。ところでD₁の黒いところが目というのにはあるいは濃淡がかかわっているかもしれない。その場合には、領域の分類としてdiの適用される可能性がある。しかし決定因として陰影が関わっているかどうかの判断は難しい。濃淡が単に輪郭を分かつものとしてしか使われていない場合があるからである。そこに何らかのふくらみや厚味が感じられているのであればcを考えねばならない。ここでもテスターが「口は？」と質問しているが、これはIカードの「ハナがないけど」という発言と同じような質問で、質疑段階で口にすべきことではない。ただしこの場合には、被験者が「ない方がいい」と答えて直接の影響はなかったようではある。

Ⅲカード 30秒。人が踊っている。カニ。もうない。1分。

(質疑) 人。黒いところ。だけどここ(D₃)にまん中があってクルクル回る。そこ持って踊ると上手に回るから。ここ足。手。顔。ハナ。首。赤いのは火。ひもでつってある。女の人。ここがふくらんでいる。

ハサミ。目(D₄)じゅじゅとしたのカニのヒゲ(D₉の下)。足(d₂)。2本足で靴はいている。

黒いところ男の人のエリ。ここの所(胸のふくらみに当る部分)がエリだから。結婚式の時だから黒い。普通は白い。服があって赤いとチョウネクタイ。形だけ。

6. W M, CF, m, H, Fire 2.5 P

女の人、胸がふくらんでいる、というのは建設的な明細化といえる。しかし踊るというのは、この反応がMでPであることを思えば付加点には当らぬことになろう。ハナとクビの指摘は横顔として微妙な所であるがそれぞれに0.5を付加しておく。結合性はこの程度では弱い感じがする。ただし、火については反応に対する必然性がない。破壊的とはいえないが建設的でもないわけである。

7. W F A 1.0 →0

ハサミというのはカニの属性であり、特に付加点の必要はない。しかし目とヒゲのどちらかに

0.5のクレジットを与えるのは可能と思われる。ただ「靴をはいている」という明細化は、おそらく子どもらしい擬人化が働いているにせよ、それについての特別な説明のない限り破壊的な明細化として考えねばならない。したがって形体水準は差引き1.0に戻る。

add.1 . dr, F,C'F obj 1.0 P

この反応は質疑段階で突然、しかし自発的に現われたものであるから付加反応とされる。ただし男の人のエリの部分はそこだけではエリとは思えない。むしろ後から指摘されるチョウネクタイがあって、それとの位置関係からエリと認めうる程度である。だから黒いとか普通は白とかいった発言は、スコアリングには直接響かない。質疑でもう少し工夫する余地はあったかもしれないが、あまり唐突に現われた反応なのでカニの反応との関係が分らなくなり、テスターが少し戸惑ったようである。連想からはクツからエリ、ネクタイという流れが考えられるが、これらの反応を一つにすることは無理な感じである。

Ⅳカード 16秒。イヌ。難しい形。暗い森かな。2分10秒。

(質疑) ミミ (d_1)。たれ下っている。ここ (d_1 の中のS) が耳の内になる。前足 (P_2)。後足 (D_1)。薄いとこ目。薄いとこハナ。薄いからよく見える。モヨウ (D_1 上部)(濃いところ)。犬はよくこうなっている (ゼスチュア)。

暗いところ。ここからギャーと出てくる道 (D_1)。薄いとこ濃いところ木にみえる。ここ (d_1) が垂れた枝。

8. W,di,S FM,Fc. A 2.5 0

この反応では領域でのdiが明らかである。その場合つねに問題になるのは、陰影がどうかかわっているかということであるのはⅡカードについてすでに述べた。そして陰影をスコアできる時は、それだけで建設的な明細化とみなされる場合が多い。この反応についていえば、もう少し質疑で工夫すればそのへんの所がもっと明確になったものと思われる。しかし、模様という発言からcをスコアしてまず間違いはない。黒色の模様という感じが僅かにあるのだが。こうなっているというジェスチュアからも十分運動感覚が感じられているし、目、ハナ、ミミの指摘もあり、形体水準はかなり高くなる。ミミが垂れ下っている、ということからmの感が少しあるけれども、スコアする程に重力の働きが感じられているとは思えない。

9. W KF,C'F pl 0.5

暗いところ、というのはとくに言及はないがC'によるものであろう。ギャーと出てくる道、にmをスコアすることはできないが距離感がありそうである。質疑のやり方ではFKがスコアされたかもしれない。森、が陰影から来ているのは間違いはないが、おそらくそれは、深さとして感じられて

いるものと思われる。枝についての言及は建設的でも破壊的でもない

Vカード 8秒。コウモリ。アヒルが2羽。

(質疑) ここハネ (D_1)。足 (d_1)。耳 (d_3)。後向いているから尾がない。形だけ。

クチバシ (d_2)。2羽でくっついて寝そべっている。(どうして?) 春だから風がきつくて。しっぽ (d_3) だから。形がよく似ている。

10. W F A 1.5 P

この反応ではミミの指摘が付加点に値する。胴と羽がコウモリの基礎形体であり、ミミはプロットにも対応しコウモリの属性でもあるからである。後向いている、というのは一つの姿勢としていつているのか、単なる絵の向きをいつているのかあいまいで、質疑段階でより明確にすべきであった。又、なぜ後向きにみえたのか聞くことが、別な明細化を促したかもしれない。

11. W FM A -1.0 →0

どんな風になっているのか、もう少し質疑段階で確かめるべきであったろう。おそらく d_2 部分のクチバシが目に入り、そこからアヒルの連想が生じたのであろう。しかしそれとプロットとの対応がないのである。 d_3 部分をシッポだからといっているが、クチバシとシッポの間の D_1 部分をアヒルの体として納得させる説明がない。そのへんの被験者の態度によっては、むしろDWとしてスコアした方がよいかもしれない。DWの解釈上の重要性を思えばもう少し慎重な質疑が必要であった。

VIカード 30秒。あの、キツネの顔だけビーッとなっている。もうない。V クモ。空のじゃなくって下のクモ。(置く) 1分30秒。

(質疑) キツネの皮の開いたところ。ぶあつい。(どうして?) 濃いとこと薄いところがあるから。ウシロ足 (d_2)。こっち (D_1 上部両端突出部) 前足。シッポはない。

モヨウ、ガラがよく似てる。口 (D_1 下部内側への小突起)。ハエなんかぐしゃぐしゃ食べるところ。アシ。6本あるでしょう。ここまで(指で D_1D_2 の境界をさす)。

12. D→W Fc,m, A obj 1.5 P

テスト段階ではカオだけといい、質疑では D_1 の部分も含めている。したがって領域のスコアリングは上ようになる。ビーとなっている、というのはもう少し質疑で確かめるべきであった。何かがビーと張っている感じらしいのだが、そこでmをスコアするかしないかが問題になる。ぶあつい、というのは明らかに陰影に基づいておりこれは建設的な明細化である。アシに対して付加点を与えてもよいかもしれない。するとフォームレベルは2.0に上ることになる。

すでに述べたことであるが、こういう場合どちらにするかはかなり微妙である。クロッパリーな

らばおそらく付加点を与えるであろう。しかし、自分としてはどうも気が進まぬということがあ
るのである。だからテスターはそういう時、自分なりの判断でスコアすればよいと思う。ただそ
のような自分の基準が、たとえばクロッパの基準よりは甘いとか辛いとかは心得ておかなけれ
ばならない。そして自分なりの基準がそのつど揺れ動くことさえなければ、スコアリングのいか
んによって解釈結果が大きく左右されることはない。スコアリングは解釈のための方便であって、
スコアリングのためのスコアリングではないのだから、あまりその正確さにこだわるのは単なる
エネルギーのロスになりかねない。ただし初心のうちは、たっぷり時間をかけて自分なりの基準
を明確に作り上げるべきことはいうまでもない。

13. D F A 1.5

モヨウあるいはガラが似ているというのは、表面の感じをいっているのか単なるモヨウをいっ
ているのか微妙である。質疑でもう少しつっこむべきであったろう。しかしこの反応だけからは
Fとスコアせざるをえない。このクチは、しばしばキバとかツメとか見られる所であり、クモの
攻撃性を表わすものでもあるから建設的な明細化と考えるべきである。アシが6本というのは破
壊的な明細化というよりは、コン虫と間違えた被験者の錯覚によるものとみなしたい。

Ⅶカード 35秒。カガミに映った女のヒト。㊟Vおたまじゃくし。ないみたい。2分30秒。

(質疑) カガミがここ(図版中央にタテの線をひく)にある。右の人がホンモノ。片方の人がウ
ソ。女のヒト(なぜ?)髪形(d₂)。ここ(D₁)がスカート。手(D₂上後突出部)

ここ(d₂)がしっぽでふにゃとなってる。ここ(D₂)が生れたてのふにゃにゃのおたまじゃ
くし。ここ(D₃の内側上部のへこんだ所)が口。(どうして?)開いてる。(ここでトイレに行く)

14. W FK H.かがみ 2.5

カガミ又は水面に映った姿には奥行があるのでFKとスコアされることが多い。ただそれがプロッ
トの左右の対称性の説明として述べられている場合はFである。又、発達的にみてFKはある程
度の心理的成熟に対応しているから、この被験者のような年頃の子どもの反応としてはかなり重
要な意味をもっている。それだけに慎重な質疑の必要なところであった。ただしこの被験者はⅣ
カードの第1反応と第2反応でもFKの可能性を思わせる反応を出している。又、左右の人物をそ
れぞれホンモノ、ウソと分けてもいる(ここでもなぜそうなのか確かめるべきであった)し、ここ
では一応FKとスコアしておく。又、左右それぞれに単独で女性とみられる部分を、カガミを媒体
として結びつけているから、これは結合反応であり、それに対して付加点が与えられる。髪型と
スカートはそれぞれ女性の属性であるから、両方とも建設的な明細化である。

15. D Fc,FM A 1.5

ふにゃふにゃというのはおそらく陰影からきたものと思われるが、やはり念の為なぜそう見えるのかは確かめるべきであろう。2つのD部分に2尾のオタマジャクシを見ているのであるが、お互いの関連については何も述べられていないものの（したがって結合反応とはいえない）、一方をオタマジャクシと見たことが他方をもそう見せたものと考えられ、これらを別々の独立した反応とみるのは困難である。クチが開いているというのは、やや弱いけれども運動を伴う建設的な明細化ということができる。

Ⅷカード 14秒。V チューリップ。 サカナ。V チョウチン。もういい。4分。

（質疑） 葉 (D₄)。ハナ (D₇)。もう一枚の新しいハッパ (D₃)。チューリップは赤いから。ハッパは色から。

ヒレ。ヨコビレ。ここ (D₇) シッポ。ここ (D₃の上部尖端) がクチ。白いところは横のモヨウでみんなでサカナ。

まん丸い形だから。ここ (D₇) はチョウチンのモヨウ。ハリ (D₃の上部尖端)。チョウチンをぶら下げるのが嫌な時さす。勉強の時電気無駄になるからここにさしておく。

16. W FC Pl 1.5

チューリップは必ずしも赤とは限らないが、華やいだ色彩をもつということ是可以する。したがってここで色彩を使用して定形としてのチューリップを明細化しているのは、建設的なものと評価することができよう。

17. W.S F A -0.5

サカナにはいろんな種類のものがあり、クロッパーのいうように、必ずしも長い形をしているとはいえないことがある。だから、時には不定形として0.5とスコアする方がよい場合がありうる。この反応はかなりズングリ型で問題なのだが、クチやシッポやヒレの位置関係が妥当であるから定形としてのサカナの基礎形体は備えているとみなしてよい。白いところは横のモヨウというのはプラスにもマイナスにもならない。魚にそういうモヨウの必然性がないからである。それよりも問題なのは、この記録では明らかになっていないが、このサカナが上から見たものではじめのヒレは中央のタテ線だということである。そうするとそこにある程度の立体性、したがってFKの可能性が考えられる。又、クチというのも、上部の裂けた所を見ているとすればこの部分だけは横から見たことになる。だから逆にマイナスの明細化ということになろう。するとクロッパーの採点では、 $1.0 - 0.5 = 0.5$ であるのが、0.5が不定形のための得点と決められているので、形体水準は一挙に -0.5 に転落することになる。そのへんのことを考えれば質疑はもっと慎重なものでなければならなかった。テスターがまったくの初心者であるため無理のないことではあるが、心得ておかねば

ならぬことである。

18. W F Obj 1.0 0

D₇をモヨウというのは多分に色彩を使用している可能性があり、質疑で確かめたいところであった。ハリについての説明は意味があいまいである。直接スコアリングに関係はないけれども、被験者の連想過程と知覚過程の相互作用を知るためには、もう少しつっこんだ質疑があってもよかったと思う。テスター自身の感想では、このあたり自分の方が少し疲れぎみの感じであったという。

Ⅸカード 14秒。コップ。パチンコのぱかっと玉の入ってゆくところ。V カナヅチ。あとはもうない。3分15秒。

(質疑) みどりのところがコップで下は台。形がよく似てたから。

ここ(D₂の接合部のあたり)に入ってゆく。全体にここが開いたり閉ったりする。今は開いてるところ。形から。

ここ(D₆)が丸くって、ここ(D₅垂直部)持つところ。形から。ミドリとダイダイは板。カナヅチだから板に釘うつ。

19. D F Obj 1.0

ここでの記録の仕方は、Ⅷカードの第2反応にもまして不十分である。テスターによれば、みどりのところ、というのはD₁Sの部分を書いている。しかし記録からはD₁としか思えない。又、この部分がコップといえ、それがガラス製かどうか極めて重大である。もしガラス製ならばそれはおそらく透明であり、その場合薄い濃淡が働いていることを考えねばならない。するとD₁Fcといったスコアになろう。もし形だけならば領域はSになる。被験者自身は「形が似ている」と述べているが、このカードの3つの反応に限らずこのプロトコルに「形から」という理由づけの多いのは、被験者の特徴というよりもテスターの質疑の仕方にそれを促すようなものがあつたからかもしれない。その意味でテスターの質問自身もできるだけ記録しておくことが大切である。又、「下は台」という下はD₁であると思う、とテスターは言うのだがあいまいであった。図版の全部を使ったのか一部だけであつたのかは、とくにW傾向の認められるこの被験者の場合、これがこのカードへの第1反応ということもあつて解釈的に相当大きい意味をもっている。その辺の吟味をあいまいなままにしたのは問題である。

20. W F,m obj 1.5

テスト段階での「ぱかっと」という発言には、明らかに若干の運動感覚が含まれているようである。質疑段階でも「開いたり閉ったり」という説明があり、一連の連続的な運動の中での「今

は開いてるとこ」なのである。しかしここでも「形から」という例の調子があり、主反応としてはFとスコアしておくのが無難ということになる。第1反応およびⅧカードの反応と同じく、色彩の使われている可能性も少しは考えておかねばならない。

21. D→W F obj 1.0 →0

「丸い」という表現がD₆部分全体のふくらみを感じてのことならば、陰影が関わっていることになる。質疑の欲しかったところである。あるいは両側の形が丸みをもっていたのかもしれない。いずれにしても建設的な明細化とみるべきであろう。質疑段階でみどりの部分とだいだいの部分を取り入れて板といているが、これはカナヅチからきた連想で、建設的な明細化とはいえない。しかしここでも、みどりの板だいだいの板という意味での色彩の使用があったかもしれない。Ⅷカード以降、疲労のためか質疑がやや粗雑に流れているきらいがある。

Xカード 40秒。V ハナビ。バイキン。(両手で顔をおおう) ない。6分50秒。

(質疑) これ (D₁₄) もつとこ。ここをもって、パチパチとみんな出てる。赤のところがポーと出て、普通の花火は粉がバツバツと出てるから。(なぜ?) 色がきれいだから。

これ見てすぐ思った。外の青が運動会やって、ここ (D₁₃) が火で、このバイキン (D₄) を殺した方が勝ち。かわいそうだけど青い方からみたら敵だから。他のところは競馬みたいに駆けてるの。

22. W mF,CF Fire 0.5

色彩については最後に言及されているだけであるし、主反応は運動であろう。持つとこという指摘は、この被験者に形体への志向の強いこと、全体としては漠とした反応でありながら、部分的にはわりにハッキリした形を見ていることを示す。たとえばⅣカード第2反応の枝とか、ややニュアンスは異なるがⅤカード第2反応のクチバシなどである。もちろんそれが付加点に値する程に建設的なわけではない。

23. W FM バイキン 0.5

運動会やってる、というのはかなり擬人的であって、人によってはMの方をスコアしたいと思われるかもしれない。しかし後の「競馬みたいに」という言葉が示すように、被験者自身に人間と動物についての明確な区別がついていない節があり、とくに人間的な運動として感じられているとはいいい切れないと思う。色彩の使用はあるかもしれないが、D₁₃の緑の部分を火としたりしているから、スコアする程のことはないと思われる。バイキンを何に分類するかは一つの問題のようにみえるが、もともと内容はそれについての解釈仮説があってこそ分類されるのであって、いたずらに細分化するのは無意味である。逆にかなり稀な内容であっても、それが解釈的に意味があるとなれば一つの項目として分類するに値する。ここでのバイキンはそれに当る、と考えてよ

かろう。

量的整理 以上を整理すると以下のようになる。

R : 23 T : 25' 55" T/R : 67" T/R_{1a} : 20" T/R_{1c} : 22" Rejection : 0
W : 18+₂ D : 5 di : +₁ dr : +₁ S : +4
M : 2 FM : 4+₁ m : 1+₃ K : 1 FK : 1 F : 11+₁ Fc : 2+₁ C' : 1+₅ FC : 1+₁
CF : +₂
H : 3 Hd : 1 A : 8 Ad : 1 Aobj : 1 Pl : 2 Fire : 1+₁ Obj : 4+₁ バイキン :
1 Map : 1 カガミ : +₁
M : FM = 2 : 4+₁ M : (FM+m) = 2 : 5+₄ (FM+m) : (Fc+c+C') = 5+4 : 2+₆
F : (FK+Fc) = 11+₁ : 3+₁ (Fc+c+C') : (FC+CF+C) = 2+₆ : 1+₃ FC : (CF+C)
= 1+₁ : 0+₂ SumC=0.5 M : SumC = 2 : 0.5 F%=48 (FK+F+Fc) %=61 W%=
78 D%=22 W : M=18 : 2 (H+A) : (Hd+Ad) = 11 : 2 A%=39 P = 4 O = 6
FL=1.65 Succession : OrdenCy

なお Succession についていえば、この被験者はⅡカード、Ⅷカード、Ⅹカードで第1反応からカード回転を行っている。又、Ⅵ、Ⅶ、Ⅸカードを除いて反応はすべてカードの方向にかかわりなくWである。カード回転がなくWとDの反応の共存しているのはⅥ、Ⅸカードにすぎない。そしてそれはD→Wの傾向を示している。カード回転をすでに非体系的アプローチの現われとみれば残る7枚のカードが体系的ということになる。クロッパーによれば、単一の領域しか現われぬカードの体系の方向はその現われたカードの方向に準ずるからである。しかし印象的にいって、この被験者は明らかにW傾向を示している。したがってD→Wの方向を本来の傾向とは思えない。そこでⅣ、Ⅸカードを非体系的とすると体系的カードは5枚となり、SuccessionはLooseになる。しかしW傾向ということできくってしまえば、カードの方向をあまり考える必要はなく、すると体系的カードは7枚でOrderlyに戻る。こうしたやり方にはかなり恣意的な要素の入りこむ余地が多いのであるが、要はすでに述べたように、そのことが解釈にどれだけ寄与しうるかいなかの問題であり、その限り、このSuccessionがOrderlyかLooseかということはそれ程の意味をもたない。スコアリングだけを厳密に考えると、以上のようないろいろな見解が錯綜し、その結果何らかの結論に達したとしても案外実りの薄いことがある。むしろそうした多様性を示している所に、それぞれのプロトコルの特徴があるのだから、それを最終的な解釈にどう組みこむかの方が大切であることはすでに述べた通りである。

以上、今回はスコアリングの考え方についてかなり詳細に述べた。ロールシャッハテストを学びつつある人のために具体的に考える手がかりともなれば、と思うからである。一つのスコアを

するにしても、そこにはいろんな角度からの考え方の背景のようなものがある。それらのすべてが最終的な解釈へと収斂してゆかなければならない。当然さまざまな迷いが生じるのであるが、そうした迷いをどのへんで断ち切って、とにも角にも一つのスコアリングにどのようなもっていくのかの具体例を示したつもりである。

なお、このプロトコルの解釈については次回に報告する予定である。当初は今回のレポートにすべて含めるつもりであったが、スコアリングだけで案外の紙数を食ってしまった。そこで2回に分けることになったことをお含み頂ければ幸いである。

文献

Klopfer, B. et al 1956 Developments in the Rorschach Technique I Harcourt
Brace & World

氏原寛 1980 心理臨床の実際 創元社

止